

聖書ではモーセと言えば律法、エリヤと言えば預言者を示します。列王記17章に登場するエリヤは、北イスラエルのアハブ王(統治874-853BC)の時代に活躍した預言者です。ギレアドの住民である、ティシュベ人エリヤ(列上17:1)と簡単に紹介されていますが、エリヤはアハブ王の妻イゼベルがもたらしたバアルへの信仰と戦った、在野の預言者です。彼ほど激烈な物言い、激しい闘い、迫害による逃亡を繰り返した預言者はいません。彼はバアル信仰のゆえにアハブに神の裁きが降り、「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。」(列上17:1)と予言したのです。そのためエリヤはアハブから、逃亡せざるを得ませんでした。

エリヤも干ばつの苦しみに襲われます。最初はヨルダン川の東のケルトの川の側に身を隠すように示されました。そこで数羽の鳥が運ぶ食べ物と川の水で命をつなぎましたが、とうとう川の水も枯れました。その時エリヤはなんと、イゼベルの出身地、海辺のシドンのサレプタに向かうよう、主に示されました。ここで最初に出会ったのが息子と暮らす、貧しいやもめでした。現在の日本でも母子家庭と言えば、経済的に困難で、様々な援助が必要とされています。それなのに神様はやもめにエリヤを養わせると告げたのです。これこそ、ありえない状況と、誰でも思ってしまうでしょう。



エリヤは町の入り口で薪を拾っている女性に「水を少々」求めますと、彼女はそれに応じて水を取りに行こうとしました。するとエリヤは「パンも一切れ」と所望しました。彼女は答えました。「あなたの神、主は生きておられます。わたしには焼いたパンなどありません。ただ壺の中に一握りの小麦粉と、瓶の中にわずかな油があるだけです。わたしは二本の薪を拾って帰り、わたしとわたしの息子の食べ物を作るところです。わたしたちは、それを食べてしまえば、あとは死ぬのを待つばかりです。」(列上17:12) 非常に衝撃的な言葉です。

最後の食事のために薪を拾っていたのでした。そしてその後には待っているものは死だけだったので。絶望の中で必死に薪を拾っていた女性は、それでもエリヤの求めに応じて水を与えようとした愛情深い親切な女性です。エリヤはここに遣わした神のみ心を信じて彼女に言います。「恐れてはならない。帰って、あなたの言ったとおりにしなさい。だが、まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい。なぜならイスラエルの神、主はこう言われる。主が地の面に雨を降らせる日まで壺の粉は尽きることなく瓶の油はなくなる。」(列上17:13-14) 持っている物すべてを捧げて、まずエリヤのために食べ物を、それから自分たちのために食べ物を用意するように。必ずその後も神は守られると言うのです。彼女はその言葉を信じ、その通りに実行し、エリヤを養ったのです。そして、エリヤの言葉どおりに、彼女の貧しい家は飢えから救われました。やがてやもめの息子が病気になって死にました。母は嘆き、エリヤをなじりました。エリヤは苦しみ、神を責めます。エリヤは子どもの上に三度身を重ねて、祈ったという言葉にあるように、息子と同じ思いになって、命を元に戻して下さいと祈りました。彼の祈りは聞かれ、息子は生き返りました。寡婦はエリヤに「あなたの口にある主の言葉は真実です」(列上17:24)と信仰を告白しました。

エリヤは、王妃イゼベルの豪華な豊かな生活ぶりを知っていました。イゼベルの故郷サレプタでは、極貧と絶望の中で死ぬしかない寡婦と幼児がいたのです。彼女は自分が貧しいのに、エリヤの貧しさに同情し、求めに応じて、すべてを捧げました。母子の姿は神の悲しみと怒りであるとエリヤは感じました。サレプタで、寡婦と子どもと共に生き、試練を受け、神を信頼する信仰を強められました。預言者としての使命に生きるように、エリヤはアハズ王と対決しようと決断したのです。